大航海時代の南蛮通辞

劉　　小　珊

要　約

大航海时代的南蛮通辞

劉　　小珊

大航海时代是一个战火纷飞、诸大名争相做着统一天下的美梦的黄金时代、相当于日本的中世。葡萄牙人此时登上了日本岛、随着南蛮文化、南蛮商品进入日本、拉开了日欧文化交流的序幕。“南蛮人”最初登上日本岛进行贸易、交流、发生了许多的事情、其中起着重要纽带作用的则是历史上被称之为“南蛮通辞”的群体。南蛮通辞、作为日本历史上最早出现的翻译群体、在大航海时代、在日本的江户历史上写下了很辉煌的一页。他们为日本引进西方科学、先进思想、繁荣日欧贸易做出了卓越的贡献。由此以后、日本的翻译事业蓬勃发展、唐通事、荷兰语通词陆续涌现、形成了一支庞大的翻译者队伍。

はじめに

「南蛮」とは、当時の日本が中国の影響を受けて最初に日本に上陸した西洋人の国――ポルトガル、スペイン、イタリアなどを呼ぶ呼称である。これらの国の人は「南蛮人」と呼ばれた。最初に日本へ来航し通商・貿易を行った南蛮人と地元の日本人との間に掛け橋の役割を果たしたのが、いわゆる「南蛮通辞」と呼ばれた人々である。筆者は、日本とポルトガルなどの国との貿易や交流はどのように行われたのか、南蛮通辞の役割はどのようなものなのかについてずっと関心を持っている。松田毅一氏は「ポルトガルは日本との交渉に最も関係が深かったから、関係史料が他の諸国に比してより多いと思われるが、事実はこれに反し、意外に少ない。」と述べているが[1]、筆者はこれらのことについて調査を行い、わずかながら残された南蛮研究や南蛮貿易史に関する文献を読んでいるうちに、興味ある南蛮通辞(ポルトガル語通訳のこと)に関する資料を発見した。今ここで小論をまとめ、南蛮通辞の研究に少しでも役に立てばと考えている。

一、通訳の歴史の昔と今

1．江戸時代の通訳

日本における通訳の歴史は長く、江戸時代（1603-1867）にすでに「通詞」という制度が存在していた。江戸幕府は長崎を直轄地として「長崎奉行」を設置し、その下に通訳・外交・貿易の実務を担当する「地役人」が置かれた[2]。それが「唐通事」、「阿蘭陀通詞」などと呼ばれていた。唐通事は中国語を専門にする通訳者で、阿蘭陀通詞はオランダ語通訳者である。日本では鎖国時代以前から長い間、ポルトガル語が盛んに使用され、「南蛮通辞」が大いに活躍したようだが、その後、鎖国体制の確立により、ポルトガル人がマカオに追放され、オランダ商館が平戸から長崎の出島に移転されたため、オランダ語通訳の必要性が大きくなり、阿蘭陀通詞の育成教育が行われ、相当な規模と組織まで成長した。それにはいくつかの特徴がある。(1)当時の通訳者は長崎奉行の管轄下にある地方公務員で、長崎でしか仕事をしない。(2)職務の内容が多岐にわたり、通訳の仕事はもちろん、外国船入港の通関や貿易関係のこともしなければならない。さらに、外交や通商において中央から派遣される長崎奉行の諮問を受けることもある。(3)通詞は公職として、階級が設けられている。レベルごとに定員が決まっており、昇格のための試験もある。(4)通詞を勤める家は指定されたもので、世襲制度を採っている。家族代々、男子に限って通詞の職を継ぐことになっている。

当時は唐通事だけで70数家もあって、10席ほどのポストをめざしていた。元禄の頃（1688-1703)、正規の阿蘭陀通詞は、大通詞４名、小通詞４名、稽古通詞若干名というのが基本で、ほかにオランダ人の貿易業務に付き添って仕事をしていた人たちが数十名から百名近くもおり、熾烈な競争だったことが窺われる。

正規の通詞が地方公務員であったことは通詞の規範を考える上で無視できかい。現代の通訳倫理は公平を旨とし、中立性を守り、秘密厳守を行動基準としなければならない。しかし、当時の長崎通詞の中ではこの常識はあまり通用しなかった。彼らは職務上、地方公務員として長崎奉行、さらには江戸幕府に忠誠でなければならないため、中立を守ることではなく、あくまで幕府の立場に立って通訳の仕事をするのである。幕府にとって必要なことなら秘密保持にもこだわらないことになる。

その典型的な事例はシーボルト事件である[3]。この事件によって重罪に処罰された数名の阿蘭陀通詞が国禁の物の交渉に関わって発覚されたため、寒い地方に追放された。前途有望で才能ある通詞が流刑地でわずか数年で命を失った。下級公務員である以上、通詞は自らの判断で事を決めることができないわけで、常に上司ないしは奉行の指示に従って行動することが求められる。シーボルト事件でスパイ行為を阻止せず、幕府にも通報せず、かえって協力したとあっては、厳罰に値することである。堀辰之助という幕末の通詞はちょっとした心得違いから裏切りの行為に走り、処罰の対象になった[4]。当時の通詞は必要に応じてオランダ語以外の言語も習得しなければならないため、通詞の名家出身だった彼は、幕府の命令を受けて英語を苦学し、後の英語辞書の編纂にも大きな役割を果たした。通訳者たちが言語の学習に励みながら、仕事にも努めていることから、昔の通詞たちの辛さが身にしみて感じられる。

2．現代通訳の特徴

現代的な通訳業についていえば、特に重要なのは、国際会議の増加と、それに伴う会議通訳者（同時通訳）の誕生である。同時通訳は第二次世界大戦後の「ニュルンベルク裁判」に始まり[5]、日本では戦後、米国大使館で通訳を担当した西山千が独自に同時通訳の方法を開発したり、米国国務省で訓練を受け日本からの視察団の随行通訳をしたグループが帰国後、「サイマル（Simul）」（同声）という会社を設立したりして、同時通訳がその時から次第に発展してきた。

現代の通訳者は世襲制度を採っておらず、地方公務員でもなく、自由契約者（free-lancer）が主である。通訳はほとんど固定的な職業ではなく、人数も制限されていない。ランクについても、通訳検定の等級か、通訳派遣会社が価格ランキングを設けている程度である。今は企業内部の通訳専門担当者を除き、放送通訳や法廷通訳など、さまざまな分野の通訳に特化しつつある。

通訳の倫理から言えば、会議通訳を含め一般的には「中立維持」と「秘密厳守」が基本的な原則である。多民族社会のオーストラリアでは、コミュニティの通訳に対しても厳しい規範が定められている。しかし、最近では移民のような少数グループの通訳をする際に、単純に「中立」を守る必要があるかどうか、通訳者が「中立」を守った結果として権力者の立場に立つことになり、少数派の権利を守ることができないのではないか、という疑問を投げかける人がいる。さらに、「中立」を守ることは、通訳者が徹底した無言の「黒子」の役を演じること[6]、つまり透明な存在であることを意味するので、果たして真のサービスと言えるだろうか、文化的

な解説を適切に加え、文化の仲介者になって、積極的な役割を果たすべきではないか、といった議論も一時出ている。制度として確立された阿蘭陀通詞の時代と違って、これからの通訳は正確さ、役割の把握、立場の選択、能力の発揮など、ハイレベルの要求とニーズに直面しなければならない。

3．通訳の仕事への理解

同時通訳者の存在が一般的に知られるようになったのは、1969年のアポロ宇宙船が月から生中継した時であろう。その後の灣岸戦争の時の放送通訳と違って、人類初の月面着陸の瞬間、各局のテレビ中継画面に映し出されたヘッドホンをつけた同時通訳者の姿が、テレビ画面にくぎ付けになって宇宙からの信号を待っていた人々に、強烈なインパクトを与えたに違いない。しかし、当時の人々は必ずしもこの放送が通訳者の仕事であるということを正確に理解されたわけではない。

さらに、1970年に大阪で開かれた万国博覧会では、学生アルバイトの通訳者が大量に雇われた。その結果、通訳の実務を体験した層が広く拡大され、「通訳」というものが私たちの身近になり、英語ができれば誰でもできる簡単な仕事という考えも広まった。「同時通訳はともかく、普通の通訳ならあの人は十分できる」という思い込みで、海外からの帰国子女や留学経験者に通訳の仕事を気楽に依頼する傾向が急増した。しかし、同時通訳であれ逐次通訳であれ、言語と文化に関する知識を欠かせてはならない。豊富で確実な外国語と母国語の基礎知識を備え、快速で機敏な反応力と熟練した思考力も要求されるので、通訳は比較的に高度な技能で、効率的かつ科学的な訓練を積み重ねなければ獲得できない能力である。これは通訳者の常識であり実情でもある。

4．日本の通訳の歴史の始まり

日本は近世以前から積極的に中国の文化と進んだ技術を取り入れてきた。明と清の時代に、大量の中国の書籍が貿易に来た中国の商船によって日本へ持ち運ばれ、販売された。当時の幕府は長崎奉行の下に「書物目利き」[7]という職を設け、漢籍に通ずる役人がこれを担当し、輸入された中国の書籍の検査と鑑別に当たった。清の時代に来日の貿易商船が運んできた中国の書籍は量が多く、内容も豊富だった。その中に、多くの価値ある古典書籍、歴史書と文学作品が含まれている。このような大規模でかつ持続的な漢籍の輸入は、中国と日本の文化交流史において大きな出来事である。幕府は輸入された書籍を官版として翻刻し、同時に大名に対しても翻刻を奨励した。この時期から、漢籍の翻刻事業が絶えざる発展を見せ、瞬く間に日本全国に広まった。皇室、僧侶、学者、武士、商人なども相次いで漢籍の翻刻翻訳に参与し、中国の文化はこのルートを通じて、ますます日本の社会に浸透していった。

日本と西洋の接触は足利時代に遡ることができる。15世紀の後半期から、西欧の大西洋沿岸の国々では大規模な海上冒険と殖民遠征が始まり、それと同時に、世界の歴史にも大きな転換期の序幕が開かれた。当時の西欧諸国の中で、とりわけポルトガルとスペインが代表的な国で

あった。1543年（天文12年）に、ポルトガル人が初めて九州の種子島に漂着し、日本に火縄銃を伝えた。1549年に、スペインの宣教師たちが日本にキリスト教をもたらした。彼らは布教すると同時に医術を施し、天動説にもとづく天文や地理などの知識も伝授した。1590年には、日本の少年がヨーロッパへキリスト教の学習に派遣された。このころは西洋の印刷術も日本に伝わり、キリスト教の書籍が数多く出版された。中には『教理問答書』、『イソップ物語』、『ラポ日対訳辞典』、『倭漢朗咏集』、『大文典』など、宗教、文学、言語学関係の本が100種近くもあった。この時期、通訳と翻訳の仕事を担当した者はほとんど宣教師などの西洋の神職関係者であった。日本人で最初に通訳として登場したのは、薩摩の武士だった池端弥次郎である。彼は殺人の罪を犯し、マラッカに逃げたが、後に宣教師第一人のザビエルに伴い、日本列島に上陸した。弥次郎はインドのゴアに送られ、宗教の教育を受けた後、洗礼まで受け、パウロという名をつけた。弥次郎はザビエルをして日本に来る決心を下させた重要な人物である。彼は鹿児島に生まれ、日本の最初のキリシタンである。

以上述べた通り、通訳は最初は外国との宗教や貿易などの交流の中で生まれ、その後は国際関係の発展に伴って職業の一種として発展してきたものである。歴史的に見れば、通訳者は宗教、貿易、文化の国際的な交流において重要な貢献をし、国と国の掛橋の役割を果たした。彼らの功績は測り知れないもので、その役割も取り替えられないものである。通訳と翻訳は歴史的には最も古い職業で、『旧約聖書』に記された「バベルの塔の記」の中の、冥界と生者の世界を結び付ける神霊のような存在である。

二、冒険に満ちた大航海時代

1．ポルトガル人の日本初上陸——南蛮貿易の開始

マルコポーロの名著『マルコポーロ見聞録』の中には次のような一段がある。

> 日本島は東洋の島の一つで、大陸あるいは蛮子海岸から約1500キロメートルの海上に位置する。この島の面積は大きくて、住民は顔が美しく、体が丈夫で、態度が礼儀正しい。……かつてここに来たことのある人の話によると、この国の王宮は立派で堂々として、とても素晴らしく、王宮の屋根はすべて金色のトタンで覆われていて、……宮殿の天井も同じ貴金属で作ったものであるという。多くの部屋の中にはぶ厚い純金の小さい机があって、窓も黄金で飾られている。宮殿のこれほどの華麗さは、なかなか言葉では表現しがたい[8]。

マルコポーロの記述によれば、日本列島はポルトガル冒険家にとって黄金の島の代名詞であって、日本列島を発見することは無数の富を手にすることになると言える。ポルトガル人は東へ進んで中国の寧波まで到着し、同時にマラッカと暹羅で南に渡った琉球人と接触し始め、日本人の事をよく耳にしたため、日本列島の発見はもはや時間の問題になっているにすぎない。

ポルトガル人が初めて日本島に来たのは一体いつのことだったのか、史学界ではすでにこの問題について多く研究がなされているが、いまだに動かしがたい結論が得られていない[9]。これは前にも触れたが、南蛮諸国に関する史料があまりにも少ないことが原因である。岡本良知氏の『十六世紀日欧交通史の研究』ではいくつかの観点を紹介し、次のように総括している。

一五四一年までにポルトガル人が渡来しなかったことはほとんど疑いがない……[10]

1543年9月23日、中国の船に乗って寧波に向かう三人のポルトガル人が台風のため、日本の九州鹿児島の南端にある種子島に漂着した。領主の時尭はポルトガル人から、口径16ミリ、長さ718ミリの火縄銃をもらった。「種子島銃」と呼ばれるものである[11]。その後、火縄銃が日本全国に急速に普及した。それをきっかけに、ポルトガル商人もひっきりなしに押し寄せてきた。1549年8月15日、イエズス会会士の聖フランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier）一行がインドのゴアから中国の船に乗って日本の鹿児島に到着し、キリスト教を日本にもたらした。この時から、日本の西洋学の始まり――南蛮学が形成された。

ポルトガル人が初めて日本島に来たのは16～17世紀で、つまり日本の中世の戦国時代であった。日本から見れば、それは戦火が飛び散り、諸大名が争って天下統一の夢を見ている激動の時代だったが、世界的に見れば、16～17世紀は大航海及び地理大発見の最盛期で、いわゆる大航海時代であった。16世紀の中ごろ、日本列島がポルトガルの航海家によって発見された後、1550年（天文19年）にポルトガル船が平戸に入港し、前に日本に来ていたイエズス会会士のザビエルもトルレス（C. Torres）とフェルナンデス（J. Fernandez）を連れて平戸に来た。その後、多くの宣教師が相次いで布教に来日した。1552年にガゴ（B. Gago）、アルカセヴァ（P. Alcaceva）などが来日し、1556年にヌネス（B. Nunes）、ヴィレラ（G. Vilela）、フロイス（Luis Frois）などが来日した。彼らは初めは九州で布教し、大名の大内義隆、大友義鎮らの保護を受け、かなり布教に成功していた。当時、日本の大名がキリスト教に加入する動機はおよそ四つある。一つ目は宣教師を仲介役にして外国の船を領地に入港させ、貿易の利益を得ることによって経済を発展させ、新鋭の武器を輸入し、激しい競争の中で生き残りを図ることである。二つ目は異国の神様――イエスの保護を得て、領地内の五穀豊穣を願い、さらに戦いの中で従来の神仏を信仰する敵に打ち勝つことである。三つ目はあらゆる失敗への不安を解消し、自信を強めるために、宣教師の説教に従って精神的な安定を保つことである。四つ目は領地内の農民を教会に加入させ、領主の信仰と一致させることで、百姓の不満を抑え、領地内の管理に有利だという考えである。

2．西洋文化の導入――南蛮学の形成

16～19世紀の日本の西洋学の歴史は、大きく三つの時期に分けることができる。第一期は16世紀中ごろから17世紀中ごろまでの一世紀で、すなわち「南蛮学時代」である。第二期は17世紀中ごろから19世紀中ごろまでの2世紀で、すなわち「蘭学時代」である。第三期は19世紀の

最後の30年で、すなわち「洋学時代」である。日本の西洋学の歴史はこの三つの時期の連続で、断続的なものではない。

西洋文化が当時日本に進入できたことは、いくつかの要因によるものである。まず、日本では中世以後、内乱が頻繁に発生し、西洋人に進入の機会を与えた。内乱によって中央集権の体制が崩壊しつつ、「16世紀の最後の二、三十年まで、外国人の日本進出を阻止するような権威はずっと不在のままである。」[12]一方では、倭寇の横行で中日間の正常な「勘合貿易」が破壊されたため、ポルトガル人が仲介に入り、中国の絹織物を日本の白銀と交換するという利益ある商売をするようになった。さらには西洋の宣教師が影のように商人の後について日本に進入した。次に、内乱は政治や経済の面で西洋人に日本進出の機会を与えただけでなく、文化の面でも「南蛮学」の形成に環境を作りあげた。なぜなら、民衆が内乱に怯えている中、従来のお寺で魂の慰めを得られないため、当然、新らたに心の安らぎを求めようとするからである。「キリストの宣教師はまさにこの機を巧みに利用したからである。」[13]第三に、世界の布教の先駆者だけでなく、世界の文化交流史において重要な役割を果たしたイエズス会自身の特質からいっても、この使命を果たすことに成功する可能性があろう。簡単に言えば、イエズス会には次のような特質がある。(1)献身的な精神を備え、絶対に服従すること。(2)時、場所、人によって、適当な妥協を認め、許容すること。(3)学問と教育を高度に尊重すること。これらの特質によってイエズス会は日本人の生活様式に順応し、地元の帰依者を「文化ショック」によってもたらされた心理的な強い抵抗から守ることができた。しかも、日本人はイエズス会を通してに西洋の科学を理解し、日本はイエズス会が「16世紀の海外布教の歴史において最もよく展開された地区」になった[14]。最後に、日本の伝統文化には、西洋の信仰を受け入れるイデオロギーの基礎が存在している。例えば、日本の民衆にとって、「キリストの十字架の伝説が少しも理解しかねないというのは、民衆の中で『苦難の神』『復活の神』というような信仰があるからである」。宮崎道生氏が指摘されたように、「武士でも庶民でも、キリスト教に心を引かれる根本的な原因は、心理的にもとの信仰に頼っても満たされないという、現実的な利益に対する追求である。そして、もとの信仰は媒介として、新しい異質なキリスト教の信仰を受け入れることを可能にした。[15]」これらの内外要素の融合によって、南蛮学時代が形成された。

南蛮文化はイエズス会の宣教師たちが日本にもたらした西洋の科学技術、文化と一般の知識によって構成される。主に教育、医学、天文、暦法、語学、文学、芸術などに及んでいる。1559年以降、イエズス会は日本で次々と教理教育の機構を設立し、1561年からは教理教育の外、言語学、数学、芸能などの科目を教授する初等教育機構も設置し始め、日本全国では教会に付属する学校は200ヵ所まで達した。「これらの機構で系統に教授された最新の西洋学芸は、近世文化の日本での誕生であると言える[16]。」1557年、宣教師ルイス・デ・アルメイダは豊後府内で施療院を開設し、もっぱら切り傷、腫瘍を治療した。翌年、彼はさらに外科学を臨床で教授し、日本人に初めてヨーロッパの外科を理解させた。宣教師が唱えた地球を中心とした天体運行秩序の説教は、決して科学の実際に合わなかったが、朝廷の秘学とした日本の伝統的な天文暦学を批判し、合理的、実証的、更に批判的な精神を喚起した。特に重要なのは、このような説教

の影響を受け、西川如見は『天文義論』において自然の法則と道徳の規範を分離させ、そして西洋の自然科学の自立性を認め、後に西洋の自然科学と文化を広範に吸収するのに、非常に重要な条件を提供した。語学の面において、宣教師たちによって編纂された辞書や文典、例えば『日葡辞書』、『落葉集』、『大文典』などは、「初めて学術的に日本語を体系化した[17]。」文学の面において、イエズス会が発行した俗世文学と教会文学の作品、例えば『伊曾保物語』などは、「如実にイエズス会のヒューマニズム主張を示した[18]。」1549年、ザビエルが鹿児島に上陸した時、聖母マリアの画像を持っていた。これは西洋の絵画が日本に入った最初であった。その後、西洋の芸術は絶えず日本に伝わってきた。美術の面で、狩野派、土佐派、住吉派などはもな、西洋の美術から深い影響を受けた。音楽の面で、日本人は宣教師のサポートで、自分で西洋の楽器作りを身につけ、聖歌隊を組織し、さらに能楽や舞踊などの日本の伝統芸能を西洋の芸能と結びつけていた。

以上のほかに、日本はその他多くの分野でも「南蛮文化」及び南蛮文化に含まれている広義の西洋文化の影響を受けていた。これらの影響は有史以来初めて日本人に、彼らは決して閉鎖的な島にいるのではないということを感じさせた。そして、日本の西洋学の最初の基礎を築きあげた。

三、日本で生まれた「南蛮通辞」

1．舶来品がもたらしたショック——南蛮趣味の流行

江戸時代に、西洋の宣教師は日本で神学院、セミナリオ、修練所を開設し、キリスト教の真の意味をより深く理解させるために、西洋人に日本語を、日本人にポルトガル語とラテン語を習得させた。これらの機関でポルトガル語を習得し、教会に入って教名を残しただけで、大した業績をあげなかった日本人学習者もいたが、その中に成功した人もかなりいた。例えば少年使節団に伴ってヨーロッパを訪問した二人の日本人使者、ザビエルに付き添って日本で布教した弥次郎の弟である約安らは、日ポ交流や日オ貿易において、ポルトガル語を使って企画や連絡などポルトガル語通訳者に匹敵する重要な仕事に従事し、つまり当時一般に「南蛮通辞」と呼ばれた役を担当し、日本の平戸あたりで活躍した。

宣教師と通辞たちの努力によって、当時の日本では南蛮の趣味が流行し、西洋的な発想の漆器、陶器と金属の工芸品が現れた。とりわけ漆絵は「南蛮の漆の芸」と称され、濃厚な西洋の特色をもっていた。その他に「踏み絵」と呼ばれた絵が多く残され、その製作技法は抜群のものである。建物については主に教会であり、日本式とヨーロッパ式を融合した性格で、今なお使われている建物が多い。南蛮文化が日本に与えた最大の影響は、科学技術である。天文暦学、医学、造船技術など各方面にわたって、日本に新しい知識をもたらした。天文暦学において、天地が神を創造することと神の存在を証明するため、天文学を中心とした自然神学の方法で民衆に科学知識と合理的精神を教え込んだ。日本人のさまざまな自然現象の発生に関する疑問に対して満足な解答を与え、みんなの信頼を取り付け、キリスト教を順調に伝播することができた。当時の宣教師が設立した神学院は優秀な天文学者も多く育成し、もちろん同時に日本生ま

れ日本育ちの宣教師と通辞も多く育成した。

2．日本人初の南蛮通辞――池端弥次郎

1549年８月15日の「聖母被昇天の大祝日」に、日本西南部の鹿児島に入港した中国の帆船から、黒い服装を着た三人の外国人――聖フランシスコ・ザビエル（イエズス会の創始者）、トルレス（スペインの神父）、フェルナンデス（宣教師）が下りてきた。彼らに付き添っていたのは鹿児島の武士だった池端弥次郎で、日本最初のキリシタンである。彼は数年前に殺人罪で海外へ逃げ隠れた。1547年にマラッカでザビエルと知り合い、インドのゴアのデ・サン・パウロ神学院に入り、宗教の教育を受けた。最後に洗礼を受けて入教し、教名をパウロと名づけた。弥次郎の勉強熱心さはザビエルに深い印象を残した。ザビエルはゴアのキリスト教宣教師に次のように語っていた。

> もしすべての日本人が、アンジロー（弥次郎のこと――筆者）と同じような学ぶことの好きな国民だとすれば、日本人は、新しく発見された諸国の中で最も高級な人種であると私は考える。このアンジローは、私の聖教講義を来聴して、信仰箇条のすべてを自分の国語によって書きとめた。彼はたびたび聖堂へ来て祈りをささげ、私に無数の質問を浴びせた。彼は何でも知り尽くさずにはおかないという強い知識欲を持っている。これは進歩が速くて、短時日の間に真理の認識に到達することのできる人物という確かな印である[19]。

弥次郎のおかげで、ザビエルは日本についていくらかの情報を知り、日本への興味をいっそう大きくした。彼は、この新しく発見された島国でのキリスト教の伝播は成功するだろうと確信し、二年後、ついに日本島に上陸し、布教活動を始めた。この時、弥次郎は随行の通訳としていっしょに来た。

ちょうど室町後期の戦国時代にあたっていて、ザビエルの来日は鹿児島の領主島津貴久から熱烈な歓迎を受けたが、最初の布教活動は決して思わしくなかった。『日本教会史』では次のように述べている。

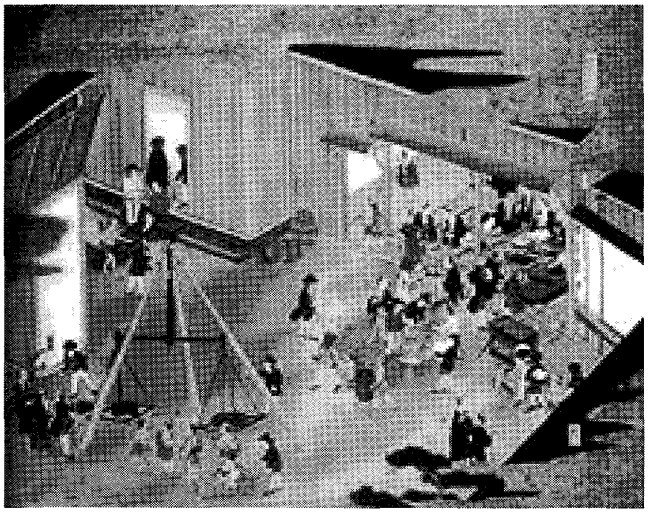
> そこには、禅宗会下僧の宗派に属する福昌寺と呼ばれる、坊主らの広壮な寺院があった。その寺院の前に広場があり、広場には寺院の塀についている山門と、寺院へ登って行く石段があった。福者バードレはそこに行くと、皆からその姿が見え、そしてその声が聞こえるように、石段の一番高いところに座り、目を天に注ぎ、悪魔どもが神の御言葉の実りを妨げることのないようにそれらを追い払うために、自分自身と聴衆に対して十字を切った。福者バードレはすでに日本語に翻訳し、そしてわれわれの文字（ローマ字）で書いておいた信仰の玄義に関する本を開いた。そしてその中に記されてある玄義を高い声で読んでゆき、通訳のパウロ・デ・サンタ・フェー（弥次郎のこと――筆者）がそれを聴衆に説明した。

その説教者の教理、風体、服装、容貌、動作の物珍しさや、彼が自分の知らない言葉で本を読む妙な発音が、日本人の生来の高慢さからして、彼らに軽蔑とからかいの気持ちを起こさせた。ある者は大笑いをし、他の者は「この連中の言うことはわからない」と言った。また他の者は、その語調について嘲り、罵って、「この連中の言っていることはまったくおいぼれのたわごとだ」と言ったり、またあるものはパウロに「いったいあの男らは気が確かなのか、正気で話しているのか」とたずねた[20]。

最初の布教活動において、弥次郎の役割は目に見えたものである。彼はザビエルがあちこちで布教する時の最も重要な助手で、ザビエルの街頭説教を通訳しただけでなく、ザビエルが最初の日本語教義を編集したことにも協力し、教義中の重要な条項を日本語に翻訳した。彼の当時の翻訳実力では間違いが出るのは当り前のことであるが、彼の協力がなければ、ザビエルの日本布教は言うまでもなく実施しがたいものである。弥次郎は自分の親友にも入教を勧め、短い間に、鹿児島のキリシタンは百数人まで発展した。

おわりに

南蛮通辞は、日本史上最初の通訳グループとして、世界史の大航海時代と日本史の江戸時代に輝かしい一ページを開いた。彼らは西洋の科学技術と先進的な思想の日本への導入と、日欧の通商貿易の繁栄に多大の貢献をしてきた。同時にそれ以来、日本の通訳事業が次第に発展し、唐通事や阿蘭陀通詞が相次いで現れ、膨大な人数を誇る通訳者層が形成された。各時期における通訳者の呼び方は違っているが、彼らが果たした役割は大同小異である。当時の史料を入念に探し、整理し、まとめて、全時期に貫く通辞たちの活躍ぶりを観察することによって、大航海時代における日本の政治・経済・文化・宗教・科学・芸術の動向を理解し研究するのに役に立つものだと思う。



ポルトガル貿易と長崎

参考文献

日本語文献

朝尾直弘ほか（1987）『日本の社会史・７・社会観と世界像』岩波書店
岩波書店（1970）『大航海時代叢書Ｘ・日本教会史・下』
岩波書店（1970）『日本思想大系25・キリシタン書・排耶書』
海老沢有道（1958）『南蛮文化』至文堂
海老沢有道（1978）『南蛮学統の研究』創文社
大庭　脩（1980）『江戸時代の日中秘話』東方書店
岡田章雄（1983）『キリシタン風俗と南蛮文化』思文閣出版
岡田章雄（1983）『日欧交渉と南蛮貿易』思文閣出版
岡本良知（1936）『十六世紀日欧交通史の研究』弘文荘刊行
笠原一男（1990）『詳説日本史研究』山川出版社
片桐一男（1995）『阿蘭陀通詞・今村源右衛門英生』丸善ライブラリー
鹿野政直ほか編（1997）『民間学事典・人名編』三省堂
児玉幸多ほか編（1973）『日本歴史の視点・３・近世』日本書籍
小学館（1990）『2001日本大百科全書・第23巻』
杉本つとむ（1995）『江戸の翻訳家たち』早稲田大学出版部
田村圓澄ほか編（1974）『日本思想史の基礎知識―古代から明治維新まで』有斐閣
東京大学史料編纂所（1976）『日本関係海外史料・オランダ商館長日記訳文編之一（上）』東京大学出版
鳥飼玖美子（2002）「現代通詞考」『通訳・翻訳ジャーナル　６月号』日本通訳学会
日蘭学会編（1991）『長崎オランダ商館日記』雄松堂出版
平松勘治（1999）『長崎遊学者事典』溪水社
堀　孝彦（2001）『英学と堀達之助』雄松堂出版
松田毅一（1967）『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房
松田毅一（1967）『南蛮史料の研究』風間書房
丸山真男・加藤周一（1998）『翻訳と日本の近代』岩波新書
水野　祐（1999）『通论・日本古代史（Ⅲ）』早稲田大学出版部
宮崎道生（1985）『近世・近代の思想と文化』ぺりかん社
村上直次郎訳・柳谷武夫編（1968）『イエズス会士日本通信　上・下』雄松堂出版

中国語文献

艾哈買徳（1981）『遠東通史』新徳里
梁生智訳（1998）『馬可・波羅遊記』中国文史出版社
孫尚揚（1993）『利馬竇与徐光啓』北京新華出版社
王暁秋（2000）『近代中日文化交流史』中華書局
王欣之（1985）『明代大科学家徐光啓』上海人民出版社
王渝生（2000）『西学東伝人物叢書』科学出版社
伍昆明（1992）『早期伝教士進藏活動史』上海人民出版社
許明龍（1993）『中西文化交流的先駆』東方出版社
厳　復（1902）『論訳書四時期』中国学術城

注

1　松田毅一『南蛮史料の研究』、風間書房、1967年、p. 40。
2　奉行：武家時代の職名。政務を分掌して一部局を担当する者。地役人：その地方の役人。
3　シーボルト事件：1828年に起こった蘭学者弾圧事件。ドイツの医学者シーボルト（Philipp Franz B.von Siebold）が帰国の際、幕府の天文方の高橋景保から得た国禁の地図が荷物の中に発見され罪を問われた。シーボルトが日本から追放され、高橋景保が死刑を下された。多くのオランダ語通訳者や蘭学

者が巻き込まれて投獄された。

4　堀辰之助：日本英語学の先駆者。

5　ニュルンベルク裁判：1945. 11. 2～1946. 10. 1ドイツのニュルンベルクで行われたファシズムドイツの主要戦犯の裁判である。

6　黒子：歌舞伎の後見人で、黒の着物、頭巾をつけ、芝居の進行を手助けする。

7　書物目利き：幕府の下に書物を管理する役人。

8　梁生智訳『馬可・波羅遊記』、中国文史出版社、1998年、p. 225。筆者日本語訳。

9　岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』、弘文荘刊行、1936年、p. 140参照。

10　岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』、弘文荘刊行、1936年、p. 140。

11　笠原一男『詳説日本史研究』、山川出版社、1990年、p. 218。

12　艾哈買徳『遠東通史』、新徳里、1981年、p. 245。

13　朝尾直弘ほか『日本の社会史・7・社会観と世界像』、岩波書店、1987年、p. 308。

14　児玉幸多ほか編『日本歴史の視点・3・近世』、日本書籍、1973年、p. 68。

15　宮崎道生『近世・近代の思想と文化』、ぺりかん社、1985年、p. 31。

16　海老沢有道『南蛮学統の研究』、創文社、1978年、p. 16。

17　田村圓澄ほか編『日本思想史の基礎知識―古代から明治維新まで』、有斐閣、1974年、p. 414。

18　児玉幸多ほか編『日本歴史の観点・3・近世』、日本書籍、1973年、p. 70。

19　「ローマのイエズス会員宛、コチン発、1548年1月20日付、ザビエルの書簡」、『日本思想大系25・キリシタン書・排耶書』、岩波書店、1970年、p. 551。

20　『大航海時代叢書X・日本教会史・下』、岩波書店、1970年、p. 371。

（原稿受理　2006年12月7日）